「マダラタガイゾナ」―議論できない禍

イゾナ科

危険度：★★★☆☆

生息数：★★★★☆

生態

マダラタガイゾナはイゾナ科の中でもポピュラーな種の一つで、首から上の皮下組織に憑く禍である。憑かれた箇所には褐色の斑点が浮き出すが、頭皮に憑いた場合は目視による発見が遅れやすいのも特徴の一つである。この禍は血管内に自らの体組織の一部を根のように伸ばし、脳へ直接繋がることにより人間の「協調」の感覚を摂取する。血液を利用しないことやその体組織の特徴、内臓と見られる器官がないことなどから、菌類寄りの生態を持つ禍としてしばしば禍の進化を語る上で名前のあがる禍でもある。現在では菌類から進化したというより、進化の過程で菌類に似た生態を獲得したのではないかという説が有力とされている。

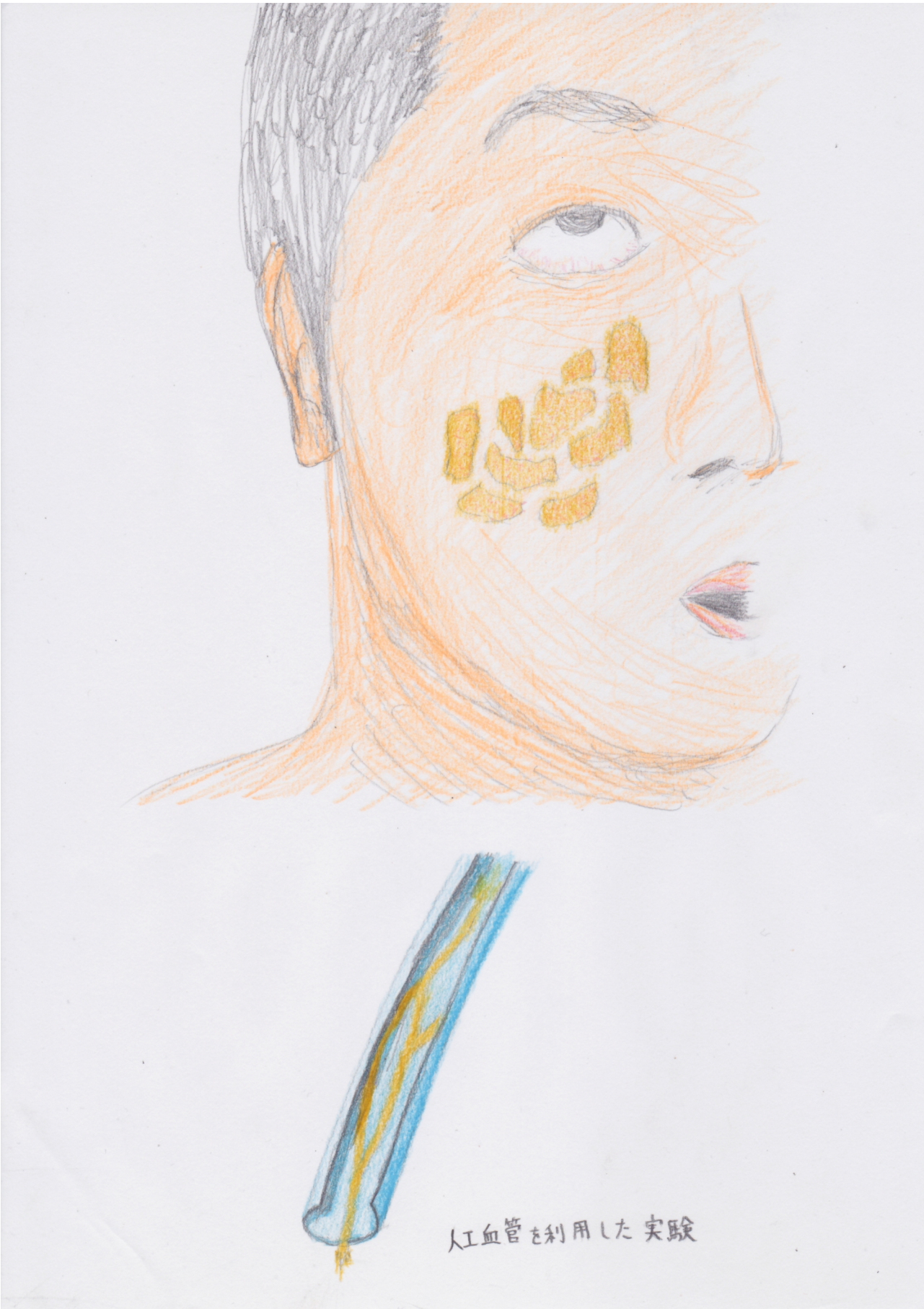
解説

協調の感覚は「他者」の感覚にも密接に関わってくるもので、敵でも味方でもない人間に対する感覚である。意見や利害がぶつかっているわけではないが一致しているわけでもない状態において、人間は両者の共通点や相違点、目的などを総合的に判断してベターな妥協点を探るという行動を取る。これが顕著に行われるのが「議論」の場であり、マダラタガイゾナに憑かれた人間はこの場において特に異常性を発揮するのである。議論の場でこの禍に憑かれた人間はまず真っ先に自分の利益を守る行動を取る。相手の意見が自分にどの程度の不利益をもたらすか、という点を理解しないために必要以上の否定や攻撃、防御を行い、また共通点も理解しないために新たな協力関係による利益を生み出すこともできない。議論とは大まかに言えば協力関係を結ぶための行為である。味方同士でなくても利害や目的の一致している部分では協力し、またお互いが抱えている問題を「お互いの力で」解決する場である。討論や対話も基本は同じで、この禍に憑かれた人間が目指すような「自己防衛」や「排他」では結局何の意味もない罵りあいになってしまうのである。

この禍に憑かれた人間は意見が完全に一致した味方同士以外の全ての人間関係で上記のような無意味な軋轢を生むことになる。完全な味方同士という存在しない関係性を追い求め、裏切られたと思い相手を攻撃し、また次の味方を探すという繰り返しの人生になってしまうのである。

対処法

協調という感覚は後天的なものであり、マダラタガイゾナに憑かれるのはその感覚の成長が十分でない場合である。よって協調の感覚を成長させることが対処法となるが、この感覚は大人になってからは外からの働きかけでは成長させることが難しい感覚であることが分かっている。しかし協調の感覚が未発達でも、「敵」や「味方」の感覚さえあれば、そこからこの「協調」の感覚は自ら作り出すことができる。「敵でも味方でもない」という存在を想像し、その実態を観察しながら想像との比較を行うことで、その存在が確かなものと認識できるようになるのである。そうなればそれに対して自分の取るべき行動を考えることができるようになる。その思考回路こそが「協調」の感覚に他ならないのである。


人工血管を利用した実験